

No.3

March 1987

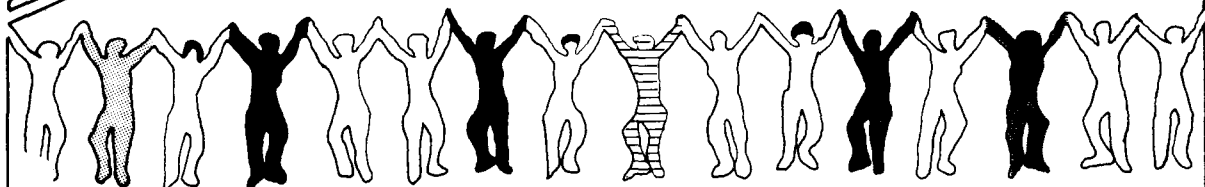
逐次刊行物

昭和 62.10.16

国立婦人教育会館
情報図書室

フェミニズム・宗教・平和の会

WOMANSPIRIT



連絡先

関東 〒281 千葉市宮野木町233 53
奥田 暁子 ☎0472(62)1167
郵便振替 東京7 8031

関西 〒612 京都市伏見区桃山町遠山80
源 淳子 ☎075(622)2825
郵便振替 京都6-31178

三つのテーマと私

新井 れい子

「フェミニズム・宗教・平和の会」が発足するということを聞いたとき、まるで、私のための会が出現したように思った。「フェミニズム」「宗教」「平和」この三大テーマは相互に関連し合っており、私の生に運命的に深くかわり、つねに対決させられてきたのに、いまだに確かな解答も指標も得られないでいるからである。

私の生まれた昭和初年の頃の鹿児島県というところは、男尊女卑の根強い封建的な風土だった。そこでは、女の性を持って生まれたということそれ自体が負だった。女の子だから、女の子のくせに、と絶えずまわりの大人たちから抑圧され、男のための女として育てられた。抵抗しようとする芽も、時代の波にもぎとられてしまった。やわらかい無垢の頭に軍国主義教育を叩きこまれ、侵略戦争を聖戦と信じて疑わず、戦力となる国民を産むための性としての使命感を植えつけられたのだった。敗戦によってそれまでの価値観と権威が一挙に崩壊し、占領という状況下であったけれど、女

にも権利と自由が与えられるようになったときは、胸の奥に押しこめくすぶっていたものが、いっぺんに燃え上るような解放感を覚え、可能性にみちた女の時代が開ける期待に、胸が躍ったものだった。しかし、現実には、長い歴史の間にがっちりと築かれた男社会の壁は、厚く堅固で、立ち向かうものを撥ね返し、容易に壊れないことを知らなければならなかった。結婚してからは、客観性から閉ざされた家庭という密室の中で、一人の男のエゴとの絶えざる闘いだった。

表面的には、ウーマンリブ、国連婦人の十年と女性解放のうねりは世界的に高まり、日本においても、最近の女性の社会進出はめざましいものがある。だがそれはまだ、一部エリート女性だけの活躍で、底辺の日常的な体験の中では、真の女性解放の道はまだまだ遠いことを実感させられる日々である。結局、女性解放といっても、女性だけの問題ではない、女性がいくら意識変革しても、男性が変わらなければ、女性解放は実現しないということを痛感させられるのである。

ものごころついたときから、浄土真宗の信仰深い祖母の影響下にあったが、女は穢れたもの罪深いものであるから成仏できないという仏教的女性観をそのまま受け入れ、自ら卑下するありかたに

は、自我にめざめるにつれ反撥していった。性差別をしない、女人成仏を説く唯一の宗教だと折伏されて、ある教団に入会した。そこで学んだ仏法は、私の世界観人生観を育てる土壌になったが、その教団の機構があまりに強い管理体制であるために、組織と個の矛盾につき当たり、またその信仰活動があまりに政治的であることに疑問を感じ、悩み、葛藤のすえ、組織からは離脱した。

大船から一人海上に飛び降りて、乗り移る船も立ち寄る港もまだ見つからず、波間に漂っているときにめぐり会ったボートが、この会である。違う宗教違う宗派の人たちが集まって、女性の視点から宗教を再検討していこうというその趣旨に賛同し、はじめて本音で語り合える場を得られたことをよろこんでいる。

戦争の悲惨さむなしさを体験した世代として、平和には切実なおもいがある。個人の幸福も国家社会の平和なしにはあり得ないことを、身をもって知っているからである。抑圧、収奪、戦争、平和を阻むこれらの起因は、究極のところ、人間のエゴイズムである。資本主義にしろ社会主義にしろ、その社会機構を機能させる主体は人間なのだから、人間がエゴイズムを超克できないかぎり、真の平和は実現できないのではないだろうか。

エゴイズムを超克し昇華させるのが宗教の役割であるし、人間解放への道であると思うのだけれど、方法論については模索の域から出られないでいる。

最近ある男性評論家が「十九世紀のなかばに、マルクスは、プロレタリアートの立場に立つことによって社会の矛盾を鋭く見抜くことができたが、同じことが、二十世紀の現在では、女性の立場に立つことによって可能なのではないか」と言っているのを目にした。「フェミニズム・宗教・平和の会」が変革の一翼をになうことができるだろうか。凡愚で微力な一員だけれど、これから仲間の皆さんに啓発されながら勉強していきたいと思っている。

「不安」の時代と宗教ブーム

奥 田 暁 子

1986年12月に行われた朝日新聞の世論調査によると、将来の生活に不安を感じる人が65%にも達するという。この「不安」の中味は円高による経

済不況や老後の貧弱な社会保障など経済的な不安が大きいと思われるが、同じ調査で、「物質面の充実」よりも「心を豊かに」する生活を願う人が圧倒的に多いことを考え合わせると、「不安」の要素を必ずしも経済的なものばかりとは言いきれないように思う。

人びとの不安感を象徴するのが「宗教ブーム」といわれる現象である。今日は新宗教、新々宗教隆盛の時代だそうである。昨年11月に、教祖の後を追って女性信者が灯油をかぶって集団自殺をしたショッキングな事件が起こったが、あのような小さな宗教集団が全国には数えきれないほどあるらしい。

これまでの歴史を振りかえってみると、社会が急激に変動するときには、宗教運動が起こっている。幕末から明治のはじめにかけては、伊勢を中心に「おかげまいり」と「ええじゃないか」という民衆の宗教的エネルギーの爆発現象が起こったし、第二次大戦の敗戦直後には、北村サヨの天照皇神宮教などの新宗教となって現われた。両者の背景となった社会状況は異なるにしても、それまで社会を支配していた価値観が根底から崩れ去ろうとするとき、民衆がこれに敏感に反応するのであろう。

今日もまた大きな変動期である。敗戦後以来の生産第一主義、効率重視、モノ崇拜の路線にストップがかかり、モノを作っても売れなくなった。モノの洪水の中で、多くの人はかえって満たされない気持ちに苦しんでいる。これは選択肢が多ければ多いほど、自分にピッタリしたものを見つけるのが困難になるからだ。それなら、窮乏時代に後戻りすればいいかとなると、そういうわけにはいかない。窮乏時代のあの飢餓感が今日の「経済繁栄」をもたらしたのであるから、また同じことをくり返すだけである。

したがって、現在の欲求不満や不安から解放されるためにさしあたって必要なのは、自分自身のライフスタイルを確立することであるが、このライフスタイルの確立もそれほど容易なことではない。というのも、現在は近代以後の人間の生き方を規定してきたあらゆる基準——男女の役割分業観、労働倫理、進歩の概念さえも——が適応しなくなりつつあるからだ。

とくに女性にとってはモデルのない時代である。目標であったはずの男の生き方が転換を余儀なくされているのであるから。女性の方がより多く新

宗教や新々宗教にひきつけられるのはそのためかもしれない。彼女たちは人間関係の濃密な、小さな宗教共同体に包みこまれることで、精神的な安らぎを得ることができるのだろう。しかも、現実の社会は核家族化を通りこして、シングル化へと向かっており、現実の共同体は減る一方である。宗教共同体はますますその数を増すだろう。

しかし、このような現象は見すごしにできない要素を含んでいる。

支配の原則は共同幻想であると言われるように、支配者は民衆を共同性にとりこむことによって、共同体（国家）の維持と安泰をはかろうとする。もし民衆の側に共同体への志向が強くあるなら、簡単に共同幻想と一体化してしまうだろう。実際、

去においても同じことが行われてきたのである。たとえば、「おかげまいり」と「ええじゃないか」に結集した民衆のエネルギーは、最終的には明治国家の天皇制イデオロギーにとりこまれてしまったのであった。

いま、「運命共同体」や「日本のこころ」などという言葉がさかんに使われるようになっているが、これらの動きと「宗教ブーム」とは連動しているように思う。共同性を求めて宗教共同体に集まる人びとの多くは、「運命共同体」の批判者となるよりも、それを受け入れるようになるのではないだろうか。

宗教というのは、大体において共同体という形をとるものである。そして、宗教共同体の多くが国家権力に同行してきたのは、残念ながら事実である。とくに日本の場合、ヨーロッパの宗教革命に対比し得るような宗教の内在的な革新運動が起こらなかったことが、日本の近代社会に専制的な性格を与え、現人神天皇の権威を、どのような宗教的権威にも優越させる結果となった、と安丸良夫は言っている（『日本ナショナリズムの前夜』）。

それから数十年経ったにもかかわらず、しかも敗戦によって、すべての古いものが崩壊したはずであったにもかかわらず、事態はあまり変わっていないように思われる。同じ轍を踏まないためには、宗教の概念そのものを新しくする必要があるだろう。すなわち、宗教とは、個人の霊の救済を第一義とするのではなく、差別や不平等のある現実を変革するための思想でなければならない。それは宗教にとってきびしい道であるが、現実肯定の姿勢からは、本質的な意味での霊の救済もあり得ないのではないだろうか。（1987年1月8日）

我々の死の選び方は いかに在るべきか

福 島 ひとみ

死後十余年を経て、三島由紀夫が目論んだ「クーデター」は、反対勢力が脆弱であるというかたちで目的を達しつつあるかに見える。一見派手やかな三島の死の一方で私は、敗戦直後の1945年9月26日豊多摩拘置所で誰に見取られることもなく、疥癬の毛布をあてがわれて干物のようになって殺された三木清の死を思う。言うまでもなく、この二つの死はまったく対照的である。

我々人間には二通りの体験がある。自ら好んでする体験と、好むと好まざるとにかかわらず、外から振りかかってくる体験である。三島の死は前者の代表的なものであり、三木清の死は後者の代表的なものだろう。三木清と三島由紀夫の「死の重さ」の違いはそこにある。自ら好んでする体験は陶酔がつきまとうゆえに、ごく普通の人間でもかなりのことがやってのけられるものである（生の境界線ぎりぎりまで突っ走る暴走族の勇敢さを見よ）。要するに三島の死は、非力な私ですらもが、ひょっとしたら思い込みしだいで案外簡単にやってのけるのではないかと思われる実は容易な死である。事実、あの当時精神障害の男が何人も三島と同じ死に方をして、割腹自殺が「流行った」ことは私達の記憶に確かなところである。しかもこちらは介錯なしの純然たるハラキリによる出血多量死であるから、これはホンモノだ。一方三木清の死は、我々人間が過酷な状況に抗してどこまで正気を保ちえるかという「正気の臨界値」の証明の問題である。試しに、陶酔に勢いを借りて一見凄絶な死を遂げたかに見える三島に、生前、お前を拘置所の独房にブチ込んでダニを取りつかせて殺してやるぞと脅したら、ヤツはおそらく震え上がっただろう。私だってご免なのである。振りかかってくる体験に、逃げることなく臆することなく立ち向かい、屈辱的な殺され方をした三木清の死は我々が人間であることを意識すればする程二の足を踏まずにいられない、難しい死である。そして私は、日本人というのはこの「振りかかってくる体験」にものすごく弱い民族であるような気がしてならない。

種々の薬を服み、あらゆる医療を活用し、一日でも長く生き延びようと懇望する現代日本の老人

達。彼らがたかだか四十年前は、国家の命で「従容として」死を覚悟して戦場に赴いた事実を顧み
るなら、その思考回路は一見矛盾しているように
思える。だが、戦争に徴用されることは、自己が
帰属する体制側の共同幻想に駆り立てられている
という意味で当人達が何と理屈をつけようともそ
れは自ら好んでする体験なのであり、体制側の共
同幻想に惜しげもなく一命を捧げることと空虚に
延命をはかることは、どちらも真の命の使い方を
知らないことで、表裏一体のものなのである。む
しろ、さしたる抵抗もなく死を覚悟して戦場に赴
いたことと、ひいてはまさに体制側の共同幻想に
よって完成された武士道の切腹との延長線上に、
現在のポケ老人達の長生競争はあるのだと考えた
方がよい。そして長い物には巻かれろ式で人間と
しての恥も誇りも顧みず、ひたすら無事息災を欲
して屈辱的な体制順応に甘んじている青壮年の男
達も、ひとたび国家の命とあらば深く考えること
もしないで一命を捧げるのである。いや、男達だ
けではない、この国の女達も、体制側の共同幻想
に動員されて死地に赴く男達を停めることは決し
てしないのである。なぜか。死ぬことは同じでは
ないか。なぜ「死の形」を一つしか選ぶことがで
きないのか、

要するに、この国は体制側の共同幻想の強さに
較べて、我々の側の共同幻想があまりにひ弱で
希薄である、というより無きに等しいといっても
過言ではない。だが、私達宗教に関わる者がいま
さに興そうとしていることこそ、その強大な体制
側の共同幻想を打ち破る幻想をということなので
ある。あらゆる宗教の開祖が单身世界の悲嘆に立
ち向かったことを考えるなら、もともと宗教とは
共同幻想を超えたところにある。六十年代のジャ
ーナリズムを震撼させた、ベトナム戦争における
仏教徒の焼身抗議、それに触発されて米国内で相
次いで起こったキリスト教徒の焼身抗議など、抵
抗に宗教が関わると常人の想像を絶した熾烈なも
のになるのは、彼らが共同幻想に支えられている
ようで実は完全に単身で「我独り」の孤絶した強
固な観念に突き動かされているからに他ならない。
我が神と己れとの純粋に一对一の対峙の問題で
あり、人間を相手にする際の生臭い雑念が入る余
地などはないのである。私があえなく潰えたチリ
革命に比較してニカラグア革命をこれは成功する
と確信したのは、ローマ・カトリックの神父達が
多数身を投じていたからであり、その意味でニカ

ラグア革命は宗教の「单身幻想」の可能性のモ
デルになるだろう。そして宗教が単なる御利益信
仰を超えて正当な市民権を得るためには、民族の
独立や社会の変革にとって不可欠だと承認させる
ことが必要なのである。

我々は生き長らえて、権力の専横とたたかうの
かも知れない。あるいは状況の逼迫次第で三木清
が選んだ死を余儀なくされるのかも知れない。だ
がいずれにしろ、体制側の幻想に相対して我々の
側の幻想による死を選ぼうではないかということ
なのである。

仏壇と長男の嫁

田 畑 康 子

10年前に実家で 100万円の仏壇を買った時のこ
とである。父方の母と母方の父の50周忌を祝して
(坊さんの言うには、50周忌ができるのはめでた
いことで良い機会だということであった一逆に言
えば、父も母も早く親と死に別れたということ
でもある。父は20才の時に母は17才の時に死別)。
その時の事で今も覚えていることは、母が父や兄
達に一生懸命に抵抗していた。過去帳をめぐる
の事である。古い過去帳に母方の父母、兄弟姉妹
の戒名が書かれていたのを長男の嫁がを見つけ、「お
かしい」と言い出したのである。彼女は浄土真宗
系の女学校を出た人で、仏壇や墓や占い等にと
てもこだわる人なので、私はにがての一人にいつも
数えていた。なにが「おかしい」のかと言えば、
父方は浄土真宗で、母方は大念仏で宗派の違う仏
様を同じに祀ってはいけな(戒名のつけ方も
宗派によって違うとか)ということ。母は嫁いだ
身であり、父方の仏壇に母方の親族を祀るのは良
くないとかの理由であった。母は、「先祖を祀る
のに父方も母方もない。仏様は皆同じ、仏様を祀
ると功德がもらえる。他の宗派では、夫の方も妻
の方も両方祀っても良いと言っていた」と反論。
すったもんだのあげくに母方の血縁関係の戒名は
過去帳からはずし、永代供養するということで決
着がついた。母は両親、兄弟姉妹を早く失くして
仏様を祀るのは自分しかいないと不満であったが、
結局、父と兄におし切られてしまった。永代供養
代が何十万とするのにも驚いた。また、墓も建て
るというので、方角がどうの、時期がどうのと、
長男の嫁がこだわっていた。その墓も百万以上も

費用がかかった。私は、父母がそれで良いなら、私の口出すべきものでないと思って干渉もしなかったが、それにしても、お金があるものだと思っていたし、面倒くさいものだとしか当時は思っていなかった。

10年後に、私の夫の両親も亡くなり、夫が長男であることから、その面倒くさい仏壇や墓のことを長男の嫁である私が引き受ける羽目になった。親の家を相続する条件で仏壇、墓の世話をすることであった。私には相談もなく、夫と兄弟姉妹との話し合いで決め、私には、夫から「そのように決まった」という報告だけであった。夫の姉から、毎朝お茶とごはんを仏壇にあげること、花の水をかえること、月に2回の祥月命日には坊主が来るので千円を包んで渡すこと、その日には、家にいること等が申し渡された。夫は、「嫁がすべきである」という風で全く無関心で聞いていた。私にとっては、「しきたり」「習慣」といえども、強制されているようで「やっかいな任務を引き受けさせられた」としか思えなかった。葬式、法事をやってみて夫や男たちは、円座を囲んで酒を飲み、話に花を咲かせている時に、女たちは、台所に立ち続けで、みんなが帰るとホッとするという程、気疲れでヘトヘトになるのである。「やっかいなこと」としか思われぬのである。

我が国では、1985年3月25日、「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」が批准され、7月25日に発効された。それには、男は外、女は内という性別役割分業の廃止が唱われ、差別的な法律、規則、慣習、慣行を修正廃止することも唱われている。長子世襲制、父方血縁優先が現代民法では廃止されているにもかかわらず、日常生活では行われている。そしてこのような「しきたり」を拒否すれば、「できの悪い嫁」「悪妻」として周囲から冷たい目で見られる。「姓氏改名」も考えたらおかしい。長男だから、長男の嫁だから仏壇、墓を継承しなければならない根拠はどこにもない。あるとすれば、「家」の継承のためのみである。仏壇、墓の継承は、制度、イデオロギーとしての封建思想を今も引き続けるために作用しているのである。仏教本来の思想からではなく、むしろ儒教思想からきているのではないか。インド、中国、朝鮮には仏壇はないと聞く。また武家社会にはあっても、庶民には無縁のものではなかったのではないか。明治になって仏教界が支配思想に屈伏して以来、庶民層を支配、統合するために、

仏壇や墓の継承（家の継承として）が厳しく強制されてきたのではないだろうか。今仏教者に問われるのは、本来の仏教とは何かということではないか。先祖崇拜思想は仏教本来のものなのかどうか。「家は先祖が守り、国は天皇が守る」というイデオロギーに多くの人達が縛られ、強制され、そして戦争にかりたてられた過去の歴史に対して、仏教者達はどのような反省の上にたって、仏教を教えようとしているのだろうか。

WOMAN SPIRIT No. 1 の中村さんの「仏壇と家制度」を読ませてもらって、私も投稿してみようという気持ちになりました。長男の嫁の役割を担わされている女として、仏壇と家制度とは、日常生活に深くかかわる問題だと思います。フェミニズム、宗教そして、平和、私は平和の問題として宗教を考えていきたいと思っています。防衛費GNP1%突破、靖国法案、スパイ法案等、きなくさい動きが見られる今日、女たちが、宗教、平和に対して、どのような態度をとるべきか、女の視点で、宗教、平和を共に考えていきたいと思っています。

仏壇、墓の歴史と仏教との関わりも興味があるので勉強したいと思いますので、参考資料等を教えて頂ければ幸いです。

海一大地一宇宙

鶴岡 瑛

仏教の方から何か書いてみるようにとお奨めをいただいたわけですが、まずお断わりをしておかなければならないのは、私は学問とか知識の習得のため仏教を学んでいるのではないということ、在家を本分としている、つまり僧職を目指していないこと、仏教用語も宗派によって異なる意味合いで用いられることがあります、私の場合真宗的な用い方に限られるだろうということです。というか私一個の責任において、という以外いかなるよりどころも拘束もない立場からかなり自分勝手な了解というものを述べさせていただくことになると思います。

まず仏教（私にとっては真宗）との出会いについて述べておかなければならないと思われます。私は神道の氏子の家に生まれて宗教とは無縁の雰囲気の中で育ちました。キリスト教についてはまだ文学的興味というか、“何かあるかもしれない”

という気持ちから聖書を覗いたことはありますが、仏教については頭から不合理なもの、古くさいものとして敬遠していたのです。

不器用な生き方ばかりしている人間で、色々ありまして生きることゆきずまったあげく、肉親から“死んでくれたほうがよかった”といわれたことがありました。どん底で死ぬに死ねぬという気持ちでいた時にいわれたこの言葉が私に“人間にとって本当の悪一罪とは何だろう”ということを考えさせるきっかけになったと思います。肉親にそこまでいわせたのは私の“罪”です。けれどもどん底にいる人間に向かってそんなことをいえるというのも恐ろしいことだと思いました。私はそこまでいわれるほどの悪いことをしたのだろうかとか、人が人を裁けるものだろうかというところから、悪とか正義、絶対普遍の真理、神とか絶対者がこの世に存在するかどうかと思いつめた時期がありました。といっても宗教を求めていたというふうにはいえないと思います。むしろ苦しい時の神だのみ、みたいなことはみじめでいやでした。それよりは理性でそうしたものを知ってみようという思いあがりと反抗的気分があったと思います。

そしてある時、キリスト教の方で啓示といわれるような体験があって、知らずに求めていた存在〔仏教の言葉でいえば阿弥陀如来ですが、他の宗教では別な名で呼ばれるかもしれません。存在と言いましたが実体的な人格神ではなく、理念といった抽象的なものでなく、大宇宙に遍満する真理の、真宗でいうところの“はたらき”そのものなのです〕に出会い、その導きでしんらんに出会わしていただき、しんらんについて学びたくて師となる方を求めて京都に行き、現在では東京のある仏教学院で聴講させていただいています。

私にとっては阿弥陀如来は普遍の真理の顕現であり疑いを容れ得ない絶対です。しんらんについては七百年余の昔ひたすらその教えに帰依して生きられた大先達であり、その人格に尊敬と慕しさを感じておりますが、絶対、無誤謬の存在とは思っておりません。やはり人間としての限界、時代の制約というものは免れ得なかったと思うのです。このことはしんらんを尊敬する者の一人一人がはっきり心に銘記しておくべきだと思います。それがないと教えが固定化、教条化する怖れがあるように思うのです。宗教には批判の、疑うことの自由があってほしいと思いますね。本当に疑い得な

いものに出会えばそれと分かるものでしょう。女性と宗教という場ではこの固定化しない、教条化させないという視点が大事なのではないかということをおきたいと思うのですが。

現在坊さんを養成するための学校で、自発的に僧侶を志す、というより寺を継ぐための資格を得るため、ある場合にはいやいや勉強に来ている人さえある中で勉強していますと、教団とか寺檀制度の矛盾というものを考えざるを得ません。矛盾の根本にあるのは、やはり寺の世襲制と信仰が個人のものというより“家”の宗旨になっているところにあると思われます。〔このことは真宗だけ仏教だけの問題というより、日本人の民族性として考えるべきなんでしょうね。仏教の場合は“無我”という大命題があるからなおさら難しいのです。無我ということが無私（日本的な私心なさ）と混同されているのじゃないかと感じています。個の確立のないところに無私なんてものをふりまわされたら厄介なことになると思います。〕

このことをしんらんについて考えてみますと、“愚禿”という名告りをよく使っておられますが禿とは僧にあらず俗にあらずという意味を表す言葉です。また“真宗”を宗派の名としてでなく“真実の教え”という意味で使っておられますし、如来の御弟子であるものを私するつもりはないというところから“弟子一人ももたず”といっておられるところからも、現在のような教団の存在など夢にも考えられなかったろうと思われるのです。

といって私は教団とか寺檀関係を頭から否定するつもりはないですし、また否定しきれものでもないでしょう。正しい教えが伝承され求めるものに開かれている場所はなければならないのです。制度が矛盾をはらんでいるから制度そのものを廃止しなければならないというような短絡的な思考法というものはしんらの思想からは出てこないようです。現に多くの矛盾の中で苦闘しながら自ら証し、後進に伝えてくださった方々がおられたからこそ、私のような真宗に縁もゆかりもないものがこうして学ぶことができていますのですから。

この理想と現実との矛盾、葛藤というところからしんらの思想を見てみますと、普通仏道修行の目的はネハン（煩惱の消えた寂靜の境地）とか仏の境地を得るところにあるようです。ようするに世俗の生活を離れ、心身の汚れを滅して智慧を完成し煩惱や苦悩のない境地に到達するということでしょうか。しんらは末法の世、濁世という

言い方で人間が修行によってそのような境地を獲得することをゆるさない時代ということをいっておられます。時代（社会）そのものが病んでいるから人間の寿命、感覚、能力が蝕まれ自力の修行によっては悟りの境地に到達することは不可能だといわれるのであります。

しんらんといえば他力ということがいわれますが、他力の教えによっても人がこの世でこの肉体をもったまま成仏できるということはないように思うのです。そのかわり死後の往生―成仏を約束された不退の境地というものがあります。境地といっても単に心境などというあいまいなものではなく、現成されている事実と考えていいと思いますが、その境地に定まった人は人里離れた場所ではないすますのではなく、この世俗の生活の真只中で仏道を行じてゆくのです。そのことが大乘仏教の究極の大目的―著く諸々の衆生と共に無上ネハんに至ろうという願いを達成してゆく仕事―凡夫の身でありながら菩薩の仕事を承ってゆくことになるのです。菩薩の仕事に従いながら身は煩惱を備えた凡夫の身を離れることがない、そこにしんらの教えられる“安心”というものが完成された、できあがってしまった静止的な心境ではなく繰り返しの現実には立ち向かってゆく意欲に満ちた境地であると、他力乗托とは何の努力もしないことではなく、ことの成否や身の安全、ひとの思惑などを思いわずらうことなく、安んじてその仕事に打ちこんでゆく生活をいわれていると思うのです。そのようにしんらの教えは人間の煩惱や凡俗の生活を避け遠ざける教えではないから僧侶でありながら肉食妻帯も許されるのです。けれどもその生活に埋没して矛盾を矛盾と思わなくなってしまうと、そのような人間の現実に対するしんらの悲嘆を共にすることはできなくなります。そうしなければ生きられぬ罪惡深重、煩惱熾盛のわれわれの現実を見つめる目を喪えば外見はどうあれしんらの精神は死ぬであります。

女性論の冒頭になぜしんらんかといいますと、先にしんらんも人間としての限界、時代の制約を受けていたと言いましたが、逆説的な言い方になりますが、それでも実際のところは驚くほどあらゆる束縛から自由な心―目をもった人ではないかと思われるからです。仏教は人間を解放する教えのはずです。ところが現実には固定的な善惡とか、倫理的な規制で精神を束縛するような面があるようです。ことに女性に対しての視点にそれを感じ

るのです。伝統的に仏教には女性差別の視点がありまして、凡夫や女性の救済を目的とする大乘教団でさえ、その根底に固く女性は男にまして罪深く、しかも修行を貫徹する力においても男性に劣るという決めつけがありまして、經典の解釈、僧侶の位階、寺院の相続などに差別体質を払拭しきれていないようです。

その点しんらんという方はあまり男性、女性という区別をたてられていないと、あれだけ人間を深く見つめた方ですから、現実における女性のあり方が見えていなかったわけではないと思われますがしんらんが人間を問題にする場合は徹底して人間の本質を問題にします。その本質に背く者は男も女も等しく自力では救からない凡夫であり、それなら誰は誰よりはましな凡夫だとか、甲の凡夫は乙の凡夫よりなお罪深いなどというような区別は立てられないはずです。

私は教えの本質を理解する上で男と女に能力の違いはあるはずはないと確信しています。むしろ業が深いとか煩惱が多いと悪口をいわれる女性の生活（身、環境）の方が苦悩を深く見つめることで教えの核心に入りやすいと思うのです。けれども既成の（組織、体系化された）教理とか教学になると女性の理解とか参入を阻むものがあるのではないかということをヴェーユを読んだ時にも感じたのです。それとしんらんについて精神の自由さということを行いました、ヴェーユについても既成の教理の硬直性に耐えられない自由な精神を感じるのです。それと人間の苦悩を徹底して見つめることで自分の信仰を見いだしたところに私はしんらんとヴェーユとの同質性を見るのですが。もちろんキリスト教を勉強してもいない私が図書館で手当たりしだいに選んだ二、三冊の本でヴェーユについて何か分かったと思うのもせん越ですが。その程度の理解にしかなませんが、彼女が神を信じながらどうしても受洗に踏みきれない、彼女をそこにひき止めているものが感覚的に分かるという気がしたのです。それは私自身、自分の本分は在家であるという思いが、学院で学びはじめてからの四年間に徐々に強まってきたことと重なり合うものがあるように思えるのです。少し感情移入が過ぎるかもしれませんが…。

長くなりますので今回はこの辺で…。もし今後とも紙面をいただけるようでしたら、仏教の根本から差別とは平等とは何かということを考えたい、またしんらんに女性差別の視点があるなら、しん

らの思想を通してそれらの批判をしていきたいと思っております。なお題名は仏教の大きさ、広がりを表す言葉のつもりです。

神谷美恵子の信仰

岩 田 澄 江

神谷美恵子は一生の間求道者であった。彼女の中にある羅針盤の針は常に「より本質的なもの」を指し示していた。何ら特別の宗教、教派に属さなかった美恵子の信仰は、まず言葉よりも生き方そのものであって、「毎日の生き方の中で自分の内なるものを外にあらわすということが、一番むづかしいことであり、同時に一番貴いことだと考えています」（著作集6巻、16頁）と記して、そこにクエーカーの「不言実行」のあり方の影響を認めている。

精神科医としてハンセン病患者と関わるには、患者に対して常に心を開いていることが必要であって、一人一人をあるがままに受け入れることである。「もし患者がすでに何かの宗教や信念を持っているならば、それを尊重するのが一ばんいいと思う。そうでない場合にはまず相手の心の世界を知ることにつとめ、それに通じることばをみつけるべきなのであろう。そのことばは、何よりも人間の生と死と宇宙とを支える、超越的な力への信頼をもたらすきっかけとなるべきものでなくてはならないと思う。この信頼がなくては、人間はほんとうは一日たりとも安心して生きて行けないはずなのだ。」（同書、33-4頁）

だが美恵子にとっての信仰は、すべてを信じるが故に結局何も信じていない、といった性質のものからは最も程遠かった。「神との対話という形で深奥の精神生活を営む事が自然ならば、そうするのを何はばかりの必要があろう。神学的にみてその神が何であろうと問題ではない。神は人間の精神の精髓であると言ってみたって一向かまわない。（中略）ただ要は自分で神を独占しているような気になって思いあがらないことだ。」（著作集10巻、128頁）そして信仰は「自分の心の底の真実なるものでありたい。他人や他人の集団にコンフォームしようとするものであってはならない」（同書、117頁）と記している。

上記と同様日記にはキリスト教の排他性その他の問題点をあげている個所が散見するが、以下は

その一つである。「聖書というものがどんなに貴い真理をあかすものであるにせよ、それはやはり精神の一形態を示すだけではないか。そこにはやはり自己陶醉があるではないか。もちろん陶醉は生きて行く上に不可欠な要素だけれど、自分の属する形態以外の形態をも理解し、多くの形態の中の一つでしかない自分の位置をも客観的に認識することこそほんとうの智慧ではないだろうか。精神医学はそれを可能にする筈だ。」（同書、140頁）

これらの引用を読んでいく時、激しい求道者の一生をおくり、カトリックにきわめて接近しながらも教会の一員となることを拒んだシモーヌ・ヴェイユを想起せずにいられない。事実シモーヌについて美恵子を書いたものもある。この二人に共通しているのは、どちらもギリシャ哲学などキリスト教以外の広い世界を知り、それをも愛したがゆえに、一つの宗教だけを絶対視し得なかった点である。それはいわゆる「正統的」キリスト教からは異端視されてきた選択であったが、最近の西欧神学界にそのような視点からの書物が見られるようになったのは興味深い。人種的・文化的・宗教的多元化現象の中で、キリスト教のみが唯一正しいという立場に固執できなくなり、コペルニクスの転回を行う人が出てきているのである。「…諸信仰の宇宙では神が中心にくるのであって、キリスト教でもなければ、他のどの宗教でもないという事実に到達しなければならない。神は光と生命の根源である太陽なのである。そしてすべての宗教はそれぞれ異なる方法によって、この神を反射しているのである。」（J. ヒック『神は多くの名前をもつ』岩波書店、110頁）多くの日本人にとってはいわば当然とも思えるこうした考え方が、文献学的研究の基盤の上にキリスト教の中でも堂々と主張されるようになってきたことは一大変化と言わねばなるまい。それは美恵子があれほど嫌ったキリスト教の排他性、独善性から自由になることであろう。

美恵子は晩年も仏教の学びを続け、広大な宇宙への想いを深めていた。死の三年前、1976年に、ペンドル・ヒルでの友人であったモートン・ブラウンへの手紙に彼女は「私は宇宙を残酷とは思いません。私自身が宇宙の一部であると痛い程感じるからです。死を一種の帰郷としてよろこんで受け入れられると思います」と記している。（「みすず」302号）さかのぼって1942年の日記に、それに対するこだまのような次の一節を読む時、自

分の内なる光に忠実に従って生きたこの人の一生の方向性がはっきりと示されている。「あらゆる努力やあらがいを越えたあの透きとおる世界の幻が私を包む。あれは私の故郷なのだ。かならず、かならず今に私はあそこに帰って行く。」（著作集補巻1、60頁）

上の友人モートンがそのノートに「美恵子さんは言葉ではなく一個の行為だった」と書きとめたのは1940年のことだというのが（「みすず」同上）、彼女の一生を今考える時に、それは深い洞察であったと思う。

『神谷美恵子著作集』みすず書房
第6巻『存在の重み』、第10巻『日記・書簡集』、補巻1『若き日の日記』

母性について

服 部 加江子

私は、西洋思想から認識者としての、かつ絶対的なものとしての自己を、仏教から無我を学んだと思います。私が聞き、理解している範囲で言えば、西洋思想と、仏教（日本）思想との葛藤を乗り越えるのは難問です。他者（自然や人間）に、自分をひとまずおいて（自己否定して）聞き入ることは真理を知ることですが、自分が目的をもって行動する（自己肯定する）とき、自己と他者との間にできるひずみを乗り越えるのに、具体的にどうするかが問題です。

母性ということで、それを考えてみたいと思います。

平塚らいてうを例にとりますと、自己確立した人間が、母性を認めた時、自己と母性との間で、八つ裂きになるのを体験した後、自分を練磨し、母性を立てつつ、自己を立てる道（他者と自分の共存する道）を見出しました。社会変革は、その実践の道でした。（彼女のもう一つの生き方が禅の伝道であったかもしれないというのは、面白いことです。）

私自身は、虚無感に浸っていた時なので、うかつにも、とにかく周りと協調路線を歩もうとして、感情も思想も押し殺した子育ての一時期があり、残念という他ありません。

子どもと自分との葛藤に油を注ぐのは、世間の母性信仰であり、夫であります。確立した筈の自

己がこんなにも弱く弱いものであるという自覚は、私を認識者の位置から引きずりおろしてしまいました。その点余計無我に近くなったと言えます。しかし、私を無くして子どもや夫に同化することを短絡的に無我と解するなら、そこには私の存在理由はありません。私という個性が成立つ必要がなく、誰でも良いことになります。生まれてこのかたの私は「このことを言って死にたい」というもの《思想》をもっています。その思想を定着せず、単に近視眼的、この世的な子ども・夫への愛に無化させることは虚無以外の何ものでもありません。

もう一方の見方があります。自己と他者（子どもや夫、人間、自然）がお互いに自分を無化して無我となったところに成立つ愛です。これは人と人、人と自然をつなぐ絆で、それ以上に高いもの、熱情があるのか、私にはわかりません。

それに引きずられて多くの女性が苦悩に陥れているのは事実です。男性の、女性に求める母性は、女性にばかり求める自己否定で、自分自身を否定することを忘れています。

無我とは、自分を否定することによって他者の呼びかけを聞くことです。認識者としての自分は、それをも上まわる他者からの真実の呼びかけを知るべきで、それが無我であり、相互のつながりが愛ですが、自己否定の後、おのずから個性が生きてこなければ、生き生きとした生とは言えません。個性は思想とも言えます。思想が成立しないなら、混沌で、是非善悪が曲解される世界になります。（日本思想が恐いのもこういう所でしょう。）

私たち女性は、母性という現世的無我愛に縛られず、鬼と思われようと、葛藤の後に成立つ愛（自分も他者も共に成立ち、信頼し合う愛）を信ずる必要があります。

この二者の相互の具体的な関係こそ真実で、これが現実の如何なる仕組みにも徹底されることが、真実の世界を到来させることになると思っています。

こう言いつつ、私の力は微力です。自己が滅んで無我を良しとしたとはいえ、自己がいつも残ってしまいます。信・不信の世界をさ迷っています。私が滅んだことが虚無に陥らないように常に努力する必要があります。ささやかではあるけれど、私固有の思想の充実を図る大切さを感じています。母性信仰やその他あらゆる既成の抑圧思想に対抗し、堂々と私自身を生かしていかながためです。緊急課題です。

第2回
フェミニズム・宗教・平和の会
シンポジウム

「日 本 的 な る も の」を問う

今、亡霊がよみがえっている。天皇制、資本主義、新宗教 etcを支える力になっている。「日本的なるもの」——その正体は何か。

共に考えませんか。

発 題

- | | |
|--------------|---------|
| 1) 新宗教の天皇制志向 | 六齊堂 美智子 |
| 2) 英霊と女たち | 山 内 小夜子 |
| 3) 母性型日本資本主義 | 源 淳 子 |

コメント

中 村 苑 子 阿 部 和佳恵

ディスカッション

と き：4月5日(日) P.M.1:00～5:00

ところ：京都市社会教育総合センター (TEL 075-802-3141) 市バス 丸太町七本松下車

会 費：会員 500円 非会員 600円

連絡先：源 淳 子 (075-622-2825) 迄

アピール (会員有志)

☆ 国家機密法案 反対、/ ☆ 軍事費GNP1%枠突破 反対、/ ☆ 低所得者圧迫の大増税 反対、/

お 知 ら せ

Tシャツを売って、運動資金に!!

「フェミニズム・宗教・平和の会」(関西)では、今後の運動資金のために、Tシャツを作って売ることになりました。

デザインは前が「女性と宗教を語る会」でつくった冊子の表紙の横顔。背中ではWOMAN SPIRIT。丸首、半袖の誰でも着ることができるものです。

大きさ M, L: 1,500円+郵送料(未定) LL: 1,600円+郵送料(未定)

種 類

①白地に黒 ②白地に赤 ③白地にピンク ④白地に水色 ⑤ピンク地に白 ⑥赤地に白

どしどし注文して、自らも着て多くの人に売って下さい。

なお、20枚引き受けて下さった方に1枚差し上げます。この場合、郵送料は無料。

注文先 〒612 京都市伏見区桃山町遠山80 源 淳 子 (TEL 075-622-2825)

教 団 と は ?

源 淳 子

1986年12月7日、「真宗大谷派（東本願寺）における女性差別を考えるおんなたちの会」が発足した。これは教団内において、寺院の代表者である住職になれるのは男性に限ると定められている女性差別に対して立ち上がったものである。その問題だけではなく、得度できる年令の男女差、僧の衣の色、寺の格などに関して、教団内にひそむ女性差別を根っことする構造的差別をつきつけた問題である。

真宗大谷派に比較されて、本願寺派（西本願寺）においては、女性が住職になれることはかなり以前から決められている。女性に道が開かれていることが女性を差別していないと主張されるかもしれないが、現実には女性が住職になっているのは、住職である夫が亡くなったとか、後継者とされる息子がまだ小さいとかの理由によって、住職になっている女性がほとんどである。建前は女性にも均等に権利が与えられていることになるが、現実のあり方は男性中心主義であり、女性はなりたくてもなれないのが現状である。女性が住職になりたいという問題ではなく、女性を住職になりたいと思わせない、また実質的には女性を住職にさせない構造を教団がもっていることが問題である。女もどうぞ、女もなれますよといいながら、女を拒否していく構造こそ女性差別の構造である。

教団内における女性差別は歴然とある。教団を運営する宗会は国会のミニチュア版であるが、女性は一人もいない。国会には女性もいて、党首に選出される時代にもかかわらず、宗教界を動かすもののなかには、一人の女性も進出できていない。こうした教団内において、真宗大谷派で女性差別を考える女たちが立ち上がったことは非常に意味あることである。最も遅れて近代化しつつある宗教界にもやっと女性差別を告発する動きが出たからである。

教団内の様々な問題を考えるにつけて、仏教における教団の意味を問わざるを得ない。教団を通して教えが伝わるといわれるが、その他のことについて何が利点だろうか。例えば、浄土真宗の教団を例にあげれば、門主を頂点とした住職、信者の関係は本山－寺院－檀家というヒエラルキーを

つくり、門主制、世襲制、檀家制度というがんじがらめの制度によって、上下関係を強化している。信仰があるという意識は、上部に向かう意識を明確にし、ヒエラルキー補完の役目になり、体制をより強力にしていく。信仰があるという意識はあるが、体制補完の意識は全くないところに問題がある。さらに、信仰をもっている層は、それが本来的な宗教であるにしろ、そうでないにしろ、弱者、被抑圧者である女が最も多い。過去において、女は業が深い、救われたいと決めつけ、だからこそ信仰が必要だと説き聞かされ、信仰をもたされた。そのあげくのはてに、信仰をもっている人ほど、寺院、本山に無償奉仕を積極的にするものだとな美化された女たちは、現在でもなお念仏奉仕団なるものを結成して、はるばる田舎から本山の掃除に出向くのである。本山の掃除を終えて、門主さまからご苦労様のお声をかけてもらったと手を合わせてよろこぶ老女たちが、信仰集団であるヒエラルキー体制を支えているのだと批判することはできない。一体何が彼女たちをそうさせたのか。我々の怒りはそちらに向かわねばならない。

そもそも仏教の本質から教団形成が可能なのかを探ってみる必要があるのではないか。もし可能ならば、その教団はどういうものになるのか再考すべきである。釈尊は出家して一人になった。そして対機説法といって、相手をみても自らが悟った内容を説いた。そこには徒党を組む思想はなかった。弟子ができて、彼らはまた釈尊と同じ方法をとればよかった。出家の思想には教団を作り、戒律を制定するものは出てこない。戒律も出家の思想からは必要でない。釈尊の教えを聞いた僧はまた一人であるはずだ。その一人がまた別の人に教えを説けばいい。そうして教えが広がるものであれば、それが仏教の本質であったはずだ。教団が作られたことによって、釈尊の出家思想も本来的なものからずれるし、世俗化はまぬがれない。世俗化した仏教が差別体制に加担したとしても何も不思議ではないし、被抑圧者をつくったのもうなづけられないわけではない。その中で被抑圧者を救おうとしたことは一種の欺瞞でさえある。落とし入れて救おうとする構造は悪質な暴力である。

もし教団をつくるのであれば、常に体制的になっていくことを否定し、世俗化していくことを否定し、徒党を組むことを解体していく方向にしかないのではないだろうか。

「日本的なるもの」と異文化

山下 明子

日本学なるものが叫ばれている。現在の日本には思想的伝統というものがない。明治の国家神道政策がつぶしてしまったのだ。知識人は戦後、西洋の進歩思想をよりどころにして、日本的なものに愛着をもたなかったし……。

というようなわけで、本来の日本を見直す、西洋思想や中国思想ではない日本思想、日本文化なるものの復元に、官のお声がかかり（再び、／）の情勢だ。今や失政だったということが判明した明治という時代のカレンダーを一枚、ひょいと持ち上げると、意味の充満した世界が、たちどころに再現するかの勢いだ。しかし、めくり上げられたカレンダーの下に、われわれ普通人の目に見えるのは、未来の風景だ。

ことさらに論じられなければならない“日本”“日本文化”とは何だろうか。私はインドにいて多様な文化を見た。文化ほど流動的かつ複雑に重層的なものはない。ところが、多くの西洋人、日本人が（つまりインドにとってはよそ者が）インドに憧れてやってくる。産業文明が失ったものをインドで見、個の根元的存在に晒されて、大きなインパクトを受ける。私もまたその一人だった。しかし、インドには、もう一つのはるかに大きなよそ者の集団がいる。2億人を越える人たちだ。そして、「不可触民」として遇され、インド人であってインド人として祝福されないこの人々がインドで見せている風景こそが、「北」の国からの旅行者やヒッピーの魂を引きつけている重要な要素であることに、ほとんどが気付かない。「精神文化」の国として讃美されるインドの、する側とされる側——する側の日本人は、日本文化を喪失して、魂のふるさとを求めているのか。短絡は危険だ。

文化ナショナリズムは近代の産物である。インドにもRSSという過激なヒンドゥー愛国集団がある。多様な文化を、日本という名前で強引に統一したのも、明治の国家神道、国体思想であったはずだ。強力な日本国家を望むおきには、その論理は、昔も今も変わるまい。

文化は「似て非なるもの」であるから面白い。支配の意図が入らなければ、出入り自由、主人と

客人の区別もいらない。純粹培養された文化というのは、あり得ても、人工的であろう。自然的存在を喪失させられていくことの内心のフラストレーションを、今日、大方の日本人はもっている。労働的な部分で創り出される文化は、だから、学者たちが、過去の日本へむかって復元を画策するそれとは、本質的にちがう。ましてや、私たち女たちは、インドの不可触民たちのように、とうの昔から、この国に生まれて祝福されず、自然的存在を幾重にも奪われてきたのだ。穢れた性であったり、聖なる母性によって社会に奉仕する性であったりして……。

近代資本主義の要請も、いまだ古典的男性中心文化の要素を放逐しきれないでいるうちに、資本体制が危機の状況を迎えると、またもや母性的化の国＝日本の復活要請に見舞われている。「ハハの母」が復活して、自由を得るのは女だろうか。

どこの文化も、男と女の関係性をよく映している。たとえば、南米に多いスペイン系のコケテッシュなダンスは、男女の性に関するカトリックの厳格な教えにもかかわらず、またマッチスモ（男の強さ、男優位主義）を映しながらなお、男女の愛の生活が何ものにも優先すると考えられている社会を見せている。一方、日本の能は女の霊の怨念を演じ、女の生命が閉じ込められていた社会を身ぶるいの中で想起させる。両者の文化が、それぞれいかに洗練され、すばらしい伝統芸能の域に達しようとも、それらが照射する^{なまろ}世界は、これから自分たちの文化を創り出したい生身の女たちの世界ではない。

「日本的なるもの」を問うとき、女はかまえて批判の視座をもち、むしろ異人になることをこそ望みたい。異文化の構造もまた、その内部において同様であることを、国々の女たちが教えあってきている。

『インド・不可触民の女たち』

山下明子著（明石書店）を読んで

大 越 愛 子

今日日本のフェミニズムに欠けているのは、「行動性」「世界性」「内面性」の三つであると思うが、この三つをみごとに兼ねそなえた稀有なフェミニストである山下明子さんの最初の著作『インド・不可触民の女たち』が出た。彼女の果敢な行

動力、広い世界的視野、豊かな内面性が各所に見出される点で、凡百の現地レポートをはるかに超えた本となっている。

インドは、アジアではフェミニズムの盛んな国の一つだが、それは上層カーストの女性たちの間でのことで、下層カースト、アウトカーストともいわれる不可触民の女たちにとっては全く無縁の話である。同じインドにいても上層カーストの女たちがめったに入らない不可触民の部落に、日本人である山下さんが1年半にわたって入りこみ、不自由な会話を通してだが、現地の女たちと心の交流をかわしたのだから、すごいとしか言いようがない。

一読してショックを受けたのは、宗教が外面生活と内面生活から女たちを徹底的に拘束している、インドの現実である。ある程度予想していたものの、これ程とは、と自分の状況認識の甘さを恥じいらすにはおれない。一方では女たちを徹底的におとしめ、他方、厳重な掟や儀礼を課して、これを遵守することによってのみ救われる、と女たちの絶望を吸いあげていく、宗教の巧妙な搾取構造がそこに生きている。女たちの受動状態を利用する男たちの性的暴力のすさまじさも怒りをよぶ現実である。しかしそれと同時に、どんな悲惨な状況の下でもたくましく生きぬく、大地に根ざしたとしか言いようのない女たちの姿も、生き生きととらえられている。先進国では失われてしまっている素朴な人間と人間との暖かい交流が各所にみられる。極限状況にあるからこそ発動する女の霊力の不可思議さは、女と宗教性についての問いを私たちに投げかけてくる。

インドの匂いとざわめきがページの間から立ち登ってくるような生々しい現地レポートである。今回についてはないものねだりかもしれないが、悲惨な状況の背後でそれを利用しつつしている、真に恐るべきものの正体が今一つ不透明であった。政治、経済、暴力の担い手である男たちのインドの問題かもしれないが、そうした男たちのインドが女たちのインドを収奪しつつしている構造的暴力体制の分析を、山下さんの今後の仕事に期待したい。ともかくも、私たちの仲間からこのような力強い本が生まれたことを、心から誇らしく思っている。

真宗大谷派における女性差別を考える おんなたちの会 発表する

教団の女性差別を問う

山 内 小夜子

昨年12月、京都において、坊守（住職の妻）、女性門徒らの有志が集い「真宗大谷派における女性差別を考えるおんなたちの会」が発会した。

私たちの宗門は、「同朋会運動」を軸にして、信仰による教団の革命運動を提起する中で、親鸞の筋筋を引くという理由で、世襲的に「門首」を継承している大谷家に代表される方々と、15年にも互っての紛争を体験しています。それは、大谷家の貴族性は大谷家独自の問題でなく、寺族全員の課題として、「自らを問う」という所で課題となったはずのものでした。単なる権力闘争ではなく、全宗門に開かれた教団再生の信仰運動たり得ようとしたものでした。その結果「十方衆生に開かれた同朋公議たる宗憲」を紛争の末に公布しましたが、その中には女の問題は何一つ語られていません。同朋会運動・教団改革運動を進めた男たちが、大谷家の貴族性は問題にするが、自らの在り方を何一つ課題としないとしたら、それを信仰運動と言えるでしょうか。

また、1986年5月に「中央坊守研修会」という公の場において、全国の坊守たちの数年にわたる地道な活動の成果である「女性住職」等（大谷派では女性は住職にすななれませんが）を求める要望に対して、教団の中で責任ある方々が「女に安心の問題が語れるのか」「ヘンなババァが住職になっていつまでも居すわられると困る」等、ガク然とするような発言をされています。各地から参集した女達の反感とわだかまりは今なお全国でくすぶっています。この発言は単に個人の発言として止まらない、期せずして現宗門の体質をあらわした発言です。「同朋会運動」の質を問われる、非常に大切な見過ごせない発言です。私たちはこの発言におし出されるような形で、小さな第一歩を踏み出しました。

参集した女たちの自己紹介はそのまま「教団の差別」紹介でもありました。日常生活の中では「愚痴」としてしか理解されえないかもしれないが、人間として生きることを教団・寺によって疎外されつづけてきた女の歴史が怒りと共に溢れ出しました。

女は住職になれない。そのために教区内の各種選挙で選挙・被選挙権がなく教団行政への参加が制限されている。例えば先の差別発言でも「ああいう人を選んだ私たちにも責任がある」ということすら言えないということです。教団を具体的に担っていくすべを持たないということです。また得度年令の差別（男は9歳で受けられるが女は20歳にならないと許されない）また、寺の中の「内陣」という聖域での儀式には不浄なる女は立ち入ることができない。生別によって衣の色が決まっ

ている。また空気のような意識としての女性蔑視等々。これらの問題を対策対策で解決していただくではなく、何とかしてくれというのでもなく、教団の中に広く深く巣くっている男と女のいのちの重さの違いをどう自分の課題としていくのか。女性を差別してきた男の歴史を、一人一人のところで親鸞の教えに問い返ししながら課題としていたきたい、というのが私たちの運動の原点です。3月8日第2回めの「集い」を京都・興正会館で開く予定です。

会計報告（関東）	1986. 12月末
収入	
会 費（27人）	54,000
出資金	50,000
購読料	7,000
冊 子	56,020
カンパ	4,300
シンポジウム	23,300
収入合計	194,620
関西から	50,000
支出	
講師謝礼	50,000
シンポジウム報告書	141,500
Womanspirit No.2	46,800
送 料	23,360
コピー代	960
支出合計	262,620
現在高	- 18,000

会計報告（関西）	1986. 12月末
収入	
会 費（42人）	84,000
出資金	170,000
冊 子	13,000
カンパ	2,200
	269,200
支出	
印刷代	71,500
郵送料	27,280
文具代	8,775
	107,555
関東へ	50,000
現在高	111,645

編集後記

Womanspirit 3号をお届けします。今回は関西で担当しました。名簿作成がやっとできました。間違っていて記載されている方は連絡して下さい。これまで会員の横のつながりがなかったと思います。思いがけず身近な人が会員だったという発見がありませんか。どんどん会員が増え、新しい開拓の場「フェミニズムと宗教と平和」の問題に取り組んでいきたいものです。関東・関西ではそれぞ

れに会合がもたれるようですが、その会にも参加できない方はこのWomanspiritへ投稿して下さい。メ切を決めていませんからいつでもどうぞ。年2回の編集はだいたい1月と9月を目安にしています。400字詰原稿で必ず横書きにして下さい。

なお新しい年度を迎えましたので、会費のまだの方は送って下さいますようお願いいたします。（年会費2,000円）（J.M.）